

スズランの話

原 秀 雄

スズランの名稱について

昨年の本誌八月号(第二巻八月号)に『秋

植球根あれこれ』と題した記事の中でスズランのことに付いて、ちよつとふれておいたが、あの中で『安政六年三月の写本、四草茶花名寄花形附』というのに君懸草とあり、本草正偽(安永五年)に八千代草、鈴蘭の名がある』ことを記しておいたが、今日ではこの草にキミカゲソウ(君影草)またスズラン(鈴蘭)が和名として普通に用いられている。また北海道ではリリーとよぶ人がかなり多く、一種の方言名となつてゐるが、これは歐洲産のセイヨウスズラン即ちドイツスズランをリリー・オブ・ザ・パレーすなわち谷間のユリというが、そのリリーから来ていると思う。川上滝弥・森広雨氏の『はな』(明治三十五年)を見ると見出しに鈴蘭・すずらんとあり、リリー・オブ・ザ・パレーの名もみえる。同書には『これぞ欧米にて鈴間の姫百合と称え、愛でに愛でらる野の花にて、一茎を瓶に挿せば香氣室に充ち、風致亦愛するに堪へたり』とこの花をたたえ更に文をついで『鈴間の姫百合なる床しき名あるこの草に、などと和名のなかるべき、穂をなせる、その花の形より鈴蘭

の名は夙くも与へられ、又の名は君影草、俗の名は馬耳蘭と称え、漢字は米蘭に宛てぬ、云々』と記してある。

北海道では普通の平地に見る地下茎のある多年草であるが、しばしば高山植物を取扱つた図譜などに記されており、日本高山植物図譜(三好学・牧野富太郎明治三十九~四十一年)には着色図があつて『多年生草本、花二佳香アリ、果実ハ赤シ』とあつて、中部・北部の喬木帯にあることが載つており、最近(昭和二十八年)出た牧野博士の原色日本高山植物図譜にも載つてゐる。飯沼愨齋翁の草木図説草部(安政三年刊)第六巻に図があり、三葉と花六輪をもつ花穂とを画かれ、キミカゲソウ・スズラン・米蘭の名が記され説がある。この植物は花葉を見て楽しむほか全草を陰干となし、強心及び利尿の薬とすることがある。

日本の各地に見られる

スズランについて

今北海道を始め本州中部に至る各地に見られるスズランは、シベリアの東部、満洲、華北、朝鮮、樺太、千島など東亜北部に広く分布する多年草で、春の早い地方では四月頃から、晚い地方では六月頃、楕円状の

先の尖つた特徴のある概ね二枚の葉のわきから出たやや弓形の花梗に、小さな白い鐘形で先が六裂した花蓋のある花を七、八個或は十個前後つける。花は下向に咲いて甚だ可憐清楚、その頃のこの花の沢山咲く地方では野に出て鈴蘭狩り即ちリリー狩りが行われ、また街頭に花店に鈴蘭の花が売られ、机上に書架の隅にこの花が飾られるのみか、航空便に托しては罐に入れられた花が天かけて、遠く住む南の知り人の机上を飾るの風景を現出する。スズランの名をもつ草は他にもあつて、ラン科植物のカキランの一名がそれである。スズラン、即ちキミカゲソウの日本に自生のものには少なくとも二つの型があり、一つは全体が小さく、一つは大きくて、高さ葉の大きき花などが大柄である、葉も一本に時に三枚生ずることがあり、花の先が六裂以上のものさえある。昭和八、九年頃島松あたりで、明かに後者のものと思われるが、葉が全部花に変わった個体が見出されたことがある。これはだから花が二本ずつ咲いていて、葉が一枚もつかない。

このような畸形は植物畸形学上から見たら面白いものだが、庭などに植付けてもずい分栽培しにくいものではないかと思うし、毎年そのような花が咲くとはかぎりぬだろう。

さて前にちよつと出たリリー・オブ・ザ・パレーという植物の本物は歐洲の原産で、日本の種類に比べて葉に円味があり、葉色が濃く光沢があり、花茎が大きく花の香りも高い。これの栽培品は早くより園芸的に改良が施され、単に庭に植付けて佳葉美花を觀賞するのみでなく、相当多量に促成開花が行われ、かつ冷蔵事業の発達に伴つて、殆ど時を選ばず開花させることが可能になつた。

スズランの性状

スズランの類は地下に竹や笹の地下茎(根茎)と同じように地下茎があつて、その先に芽を着けるが、この芽に葉だけを出す葉芽と、花を咲く花芽と、更に地下茎になる芽とがあり、葉芽は細い筍形をしてゐるが、花芽は基部から芽先の少し下のあたりまで一側がやや膨れ、葉芽より一体に肥えている。地下茎となる芽は、葉芽、花芽の基部側方にあつてずつと形が小さい。

スズランの類の春の芽出しは割合におそく、札幌附近で概ね五月中下旬、開花は六月上旬であるが、歐洲原産のセイヨウスズラン即ちドイツスズランはこれより少し早い。ドイツスズランには色々の変品があつて、葉に白や黄の縞斑のあるもの、葉に白の覆輪のあるもの、花が白八重咲のもの、花の桃色のもの、同じく桃色八重咲のものなどあるが、最も普通に培養されるのは、花の白一重早咲で緑葉のものである。

西洋スズランについて

スズランに好適した場所

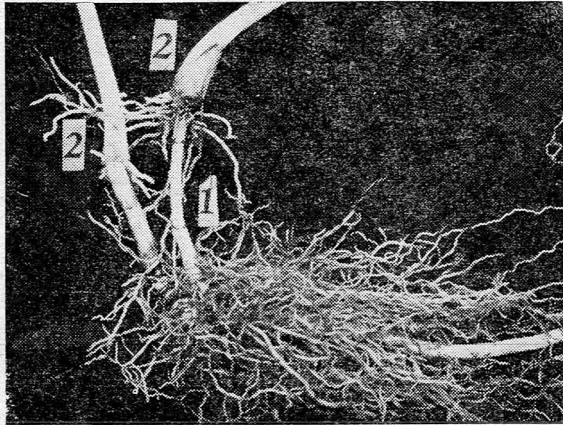
スズランは火山灰地などにも多く生じ、排水よく、かつ常に適当な水湿の保たれる土地を好む。庭に植付けて観賞する場合には、腐植質の相当にある乾湿中庸を得た所を選んで植え付ければ最もよく、粘質、砂質いずれにもあまりかたよらぬような所であれば植栽できる。一日中日当りの強い所よりも夏の午後二三時頃からは日かげのできるくらいの方がよい。しかし日蔭が度を越すと花つきが悪くなる。夏高温の地方では日蔭の幾分多い方がよく、それほど高温でない地方では日当りのやや良いことが必要である。

スズランの植付け

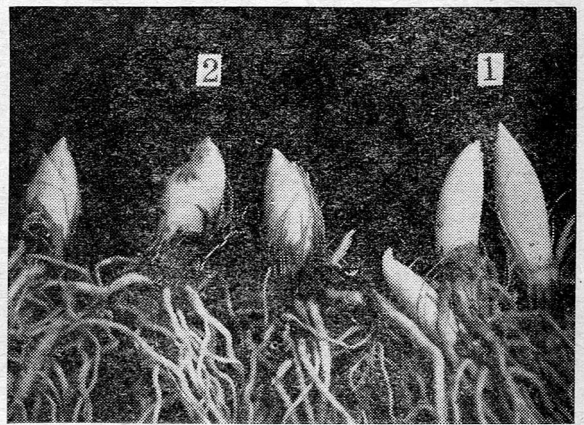
植付は葉の枯れる八月末以後秋のうちに行うのが最もよく、芽と芽との間をほぼ二寸くらいになるように植付ける。野生品、培養品を問わず、地下茎諸共植付け、根も切らぬようにつとめる。株が生長繁茂するに従つて、年々よく花をつけるようになる。初めの植付けの深さは芽先が土でかくれるほどに植付けるが、覆つた土が沈着して多少芽の上の土の厚さが減つても、芽が土上に出ないだけの深さは必要である。落葉を堆積腐朽させたものや、よく腐熟した堆肥を、秋葉が枯れてから土表に敷くと肥効がある。このようにすれば、庭先でも花葉を楽しむことができる。これは日本種でも洋種でも同様である。

スズランの芽(ピップ)について

スズランの芽はこれをピップというが、



スズランの地下茎と根①及び葉の基部②



ドイツスズランのピップ①は葉芽②は花芽

花芽の分化は七、八月で、北海道は氣候冷涼なためこれの生産地として最も有望で、ドイツスズランのピップの生産は、戦前相当の量を見たが、戦時中全く生産が行われなくなり、戦後その生産をとりもどすよう努力されているが、未だ十分でない。欧洲におけるピップの主要な供給地はドイツで、生産地により色々と呼んでいる。面白いことにはベルリン地方産のものをハンブルグピップと呼び、ハンブルグ地方産のピップをベルリンピップと称えるということがある。

ピップの生産について

ドイツスズランのピップの生産を行う場合にはまず肥沃な適湿地で表土の深い場所を選び、腐熟した堆肥(坪当り一貫以上)などを元肥として撒布耕鋤し、整地して幅三、四尺の床を作り、これに三寸くらいの株間に一芽ずつ植付ける。植付けの要領及び時期は前述の通りである。また堆肥とともに油粕、魚粕、木灰などを施すが、この場合、施用後十四、五日してから植付けないと、油粕、魚粕の醗酵により生育を害することがある。また秋末床の表面に腐熟堆肥を敷くようにし、また生育中薄い下肥を時々施す。植付後三年目の十月末から十一月株を掘上げ、ピップを選別して太つた花芽のみ揃えて促成用とする。また選別の際に取り除いた芽(大部分葉芽)は前と同様に整

えた床に植付け、更に三年の間培養してピップを養成する。掘上げ選別したピップは湿した鋸屑か水藪で根を包み、乾かぬようにするとともに凍らぬようにせねばならぬ。ピップは一般に粘質土で生育したもので、砂質土で生産したものの方が促成が容易である。また秋早く掘上げたピップは一旦低温に(五十日位)あわせぬとそのままでは促成の成績が悪いが、十月の末または十一月に入つてから掘取つたピップは促成の成績がよい。これは十月から十一月の間の気温の下降により、いわゆる休眠を十分にとつたものを掘上げることとなり、促成開花の成績が挙がるのである。

スズランの促成開花の方法

ついでに促成開花の方法を記そう。まずピップの根はあまり切りつめぬようにして、木箱または鉢に二寸または三寸×一寸の間隔に軽い用土で植付け、湿つた水藪で覆い、促成する室に移す。この促成室は摂氏二〇〜三〇度に保ち、かつ多湿にした上に暗くする。八日乃至十二、三日を経て芽が動いた時に温度を二五〜三〇度位に上げ更に芽が一寸五分〜二寸位になつた時に水藪を除去、花を咲き初めた時に一〇〜一五度の割合に低温で過湿でない通風のよい室に移す。週一回または十日に一回位の割合で順次に促成を行うようにすると、冬中促成開花を行うことができるが、概ね十一月から十二月中旬位までは、促成に相当熟練が必要であるが十二月中旬以後は割合に容易で、温度も前記よりやや低目でよく、